

西宮ロット・エ・ガロンヌ交流市民の会

2016年3月16日 Vol.136 発行者:森田正樹 編集:広報部
〒662-0911 西宮市池田町 11-1 フレンテ西宮 4F 秘書課内
TEL:0798-35-3468 FAX:0798-32-8673 Mail:info@nleg.net

フランス美術あれこれ 17 ルドン

森田正樹

Odilon Redon ボルドー 1840 - パリ 1916

奇っ怪な笑う蜘蛛や一つ目の巨人など「黒の時代」の不思議な作品、一方 50 歳を超えてから描き出した油彩やパステルによる色彩豊かな花や女性像、2つの作品群で知られるルドン。今年は没後 100 年に当たります。

オディロン・ルドンの父は新大陸アメリカに移住し、ルイジアナで財産をつくり、20 歳年下のクレオール（植民地生まれのフランス女性）と結婚し 1840 年に帰国します。その直後の 4 月 22 日、ボルドーでルドンは生まれます。

ルドンは生後まもなく乳母の手にゆだねられ、ボルドーの北西 30km のペイルルバードで 11 歳まで暮らします。当時のブルジョア家庭では新生児を乳母に預ける習慣があったので驚くことではないのかもしれませんが、ルドン家の他の子どもたちはボルドーで育ったようなのでやはり尋常ではないと言えるでしょう。ルドンの本名は父の名前をもらってベルト＝ジャンですが、母マリーの通称オディールに由来するオディロンを名乗ります。

子どもに頃から絵画を学び自然をよく観察して写生をしていましたが、20 代のルドンは鬱々とした日々をすごしていました。1862 年父の勧めで挑戦したエコール・デ・ボザールの建築科の受験に失敗し、画家を目指してジャン＝レオン・ジェロームのアトリエに入りましたがすぐにやめてしまいボルドーの父の家にもどってしまいます。

そして、その頃たまたまボルドーに定住していた放浪の版画家ロドルフ・プレスダンに師事し、小さな画面に黒一色で表現する版画という分野の面白さにルドンは開眼します。

11 歳まで過ごしたペイルルバードは、ルドンの「黒」にとって大きな意味を持ちます。ぶどう園と荒涼とした林と沼しかないこの田舎に頻りに滞在し、30 歳で徴兵により従軍した普仏戦争後も、1874 年の父の死後パリに定住してからも、夏はペイルルバードに滞在しました。

闇にうごめく怪物、悲しげでどこかユーモラスな巨人。ルドンはモネと同年の生まれで、印象派全盛の時代に印象派の画家たちが、まばゆい陽光をキャンバスに捉えようとしていたころ、彼は独自に幻想的な絵を描きました。目に見えない何かを、主に黒を用いて。この黒蜘蛛とその笑みは人間の心の奥の闇に潜む欲望や嫉妬を具象化するとともにそれをあざ笑っているかのようです。

1897 年ぶどう園の経営が行き詰まりペイルルバードを売却しなければならなくなりますが、この頃ルドンはすでに色彩に関心を移しており、黒い幻想を培った土地ペイルルバードの喪失とともに「黒」の時代は完全に終わります。

ルドンはパステルに移行しさらに油彩にも挑戦し幻想的な色彩絵画を創造します。



《蜘蛛》1887 年



《トルコ石色の花瓶の花》1911 年ころ

1890 年ごろから突如、豊かな色彩表現を開花させたルドンは、多くの神話画、宗教画、静物画などを描きます。現実の花をモデルに描きながら描かれたものは幻想の花となります。

外部に対し扉を閉ざしわれとわが思いに没入する女性像は象徴主義の特有の作品といえます。

若いころに目玉を描き、晩年には目を閉じた女性を描いたルドン、彼が見ようとしたものは一体何なののでしょうか、目を閉じなければ見ることの出来ないもの、自らの内面世界なののでしょうか。

ところで、昨年亡くなった水木しげるの「ゲゲゲの鬼太郎」に登場する目玉おやじは、水木が子どものころに親父の買ってきたルドンの版画集に触発されたものようです。

大谷美術館もルドンの版画を所蔵していますが、日本では岐阜県美術館のコレクションが有名です。

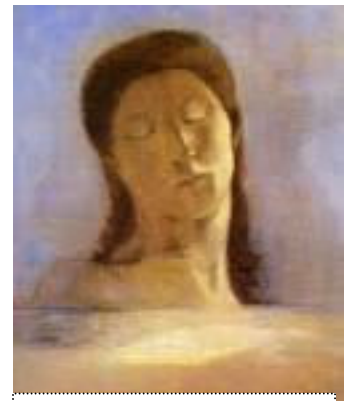
参考文献

「REDON」

姫路市立美術館

ルドン展図録

2009 年



《目を閉じて》 1890

カランドリエ

「最強のふたり」

藤枝知子



今月は近年の人気フランス映画の紹介です。

原題「intouchables」これは、2011 年の公開以来、長らくレンタルビデオ店舗でも、人気作品上位にあったので、すでにご覧になられた方も多いと思います。

私も、何度見返しても、「面白いな～」とその度見入っては大笑いしてしまいます。

フランスでの実話を基にした題材です。

テーマは「友情」ですが、大笑い要素だけでなく、「障害者差別」「階級社会」「移民の貧困」など現代フランスの抱える重い問題を、軽妙なテンポでサラリと浮き彫りにします。

配給会社の宣伝によると、主人公ふたりは「事故で全身麻痺となり車イス生活を送る富豪と、凶らずして介護役に抜擢されたスラム出身の黒人青年」です。そのふたりが、互いの置かれている状況を越えて精神的に対等な立場となり、友情を育み人生を謳歌する様を描きます。

舞台は「高級住宅街とスラム」と書かれていますが、日本で想像しているのとは、少し事情が違います。

高級住宅街どころか、「パリ市内の一等地にある贅を尽くした貴族の館」です。

他方、フランスには季節移動する物乞いを生業とするロマ族の期間限定キャンプ以外、スラム的なものは存在しません。非衛生で無秩序なスラムはなく、フランス人から「ZUP」と呼ばれる低所得者層向けの高層公共住宅があります。貧困層であれば、フランスオリジナルの人種である白人も、海越えてきた東洋人も住んでますが、圧倒的に多いのはイスラム系、次には黒人系でしょうか。

ZUP を語ろうとすると、西宮市民の皆さまが想像しやすいのは、武庫川のレインポータウンのマンション街ですが、どこか楽しげな雰囲気漂うレインポータウンとの違いは、ZUP の高層住宅はベランダやバルコニーなどなく、あっさりした内装です。6,7 階の建物ならエレベーターも付いて



いない場合が多いです。

子どもさんの家族が多いのも手伝って、ビルの一室のような部屋は、いるだけで閉塞感があります。田舎のZUPは、少しガラが悪い気がする程度ですが、パリなどの大都市郊外にあるZUPは、殺伐とした印象です。

移民三世、四世はフランス生まれでも、子ども時代から真面目に勉強しても就職差別は存在していて、中々職が見つからなかったりと、日々やるせない想いを持った若者が出かける先もなく、敷地内で佇んでいたりします。

フランスは日本とは隔世の感があるのでは？と感じるほど、社会階級が存在し、また階級により話題も違います。日本の「格差社会」よりフランスの階級間は乖離しています。行きつけのスーパーマーケットすら違います。もちろん、誰でもどこのスーパーに行く自由も権利もあるのは言うまでもありませんが、ZUP近くにある安いスーパー(一種類一品目しかない、廉価商品がおいてある)には、フランスの「中産階級」の人々はまず出かけることはありません。

そして、音楽。

幼稚園や小学校で、音楽の授業がほとんどないフランスでは、クラシックなどの音楽を知ることができるのは、「中産階級」以上の家庭に偏ります。贅沢品の扱いに近いかもしれません。低所得者層が気軽に楽しめるのは、ラジオやテレビから流れるロックやポップスです。

こういうことが分かってくるにつれ、「日本は誰にでも機会与えてくれるよい国だなあ」と感じたものです。

フランスの障害者事情にはそんなに詳しくありませんが、ただ一つ言えるのは、石畳の道や古い建物多いフランスより、日本の方がバリアフリー化が進んでいて、付き添いなしで1人で移動する人は日本の方が圧倒的に多く見かけるように思います。

自分の意思で自由に動ける歩道などが多い点では日本の方がよいかもしれません。

映画の車イスの主人公は、ブルジョワ階級ですが、障害を持つ故、自由な発想と本質を見抜く鋭い眼をもち、独自の感覚で、恵まれない環境で育った黒人青年の優しく豊かな感性を見出し友情を深めます。

私もフランスでは、どの階級にも属しない、ある意味この映画と同じ「intouchable」な存在なのか、感性だけを頼りに、本質的に似ている価値観合う人を友人にしていました。

そんな友人達は、ZUPにも住んでいたし、田舎の「ブルジョワの館」にもいました。

おかげでZUPに泊まることできたし、ブルジョワの別荘にも泊まることでき、フランスの現地生活をより深く知ることができました。

もちろん、ZUP内の倉庫のようなスーパーにも行きたい時に行き、自由にお買い物を楽しむことができたのは言うまでもありません。

フランス生活がよく描かれているこの映画。まだご覧になられていない方は、必見ですよ。



<編集後記>

3月号には、絵画部からスケッチ絵画展の案内ハガキが同封されていますので、3月号は案内ハガキを合わせて会報とさせていただきます。

なお、スケッチ旅行会作品展は、4月12日(火)～4月17日(日)の間、北口ギャラリー第3展示室(アクタ東館6階)で開催されますので、ぜひ、お立ち寄りください。

(広報部)

2016年4月11日(月)～18日(月)

ロット・エ・ガロンヌ、アジャンウィーク



ロット・エ・ガロンヌ県 及びアジャン市との交流展

日時：4月11日(月)～18日(月)
10:00～18:00

11日(月)は正午より、
最終日は16:00まで

場所：(公財)西宮市国際交流協会
展示コーナー

入場無料

第19回アジャン スケッチ旅行会作品展

日時：4月12日(火)～17日(日)
10:00～18:00 最終日は16:00まで



場所：西宮市立北口ギャラリー
アクタ西宮東館6階 第3展示室

フランス語でエンジョイ

日時：4月17日(日)13:30～15:00

場所：(公財)西宮市国際交流協会会議室

ゲスト：ケラ・ジョエルさん(コトジゴール出身)

内容：フランス語での会話を楽しむ

対象：フランス語での会話を楽しめる方

参加費：一般500円

当協会賛助会員300円

定員：15名(先着順)

申込方法：3月28日(月)9:45より

電話で申込 TEL:0798-32-8680



問合せ

西宮市秘書課 (0798)35-3459

(公財)西宮市国際交流協会 (0798)32-8680

西宮市池田町11-1 フレンテ西宮4階 JR西宮駅南出口すぐ

主催：西宮市、(公財)西宮市国際交流協会

共催：西宮ロット・エ・ガロンヌ交流市民の会